Osaka University Knowledge Archive

Title	懐徳堂要覧
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90237
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

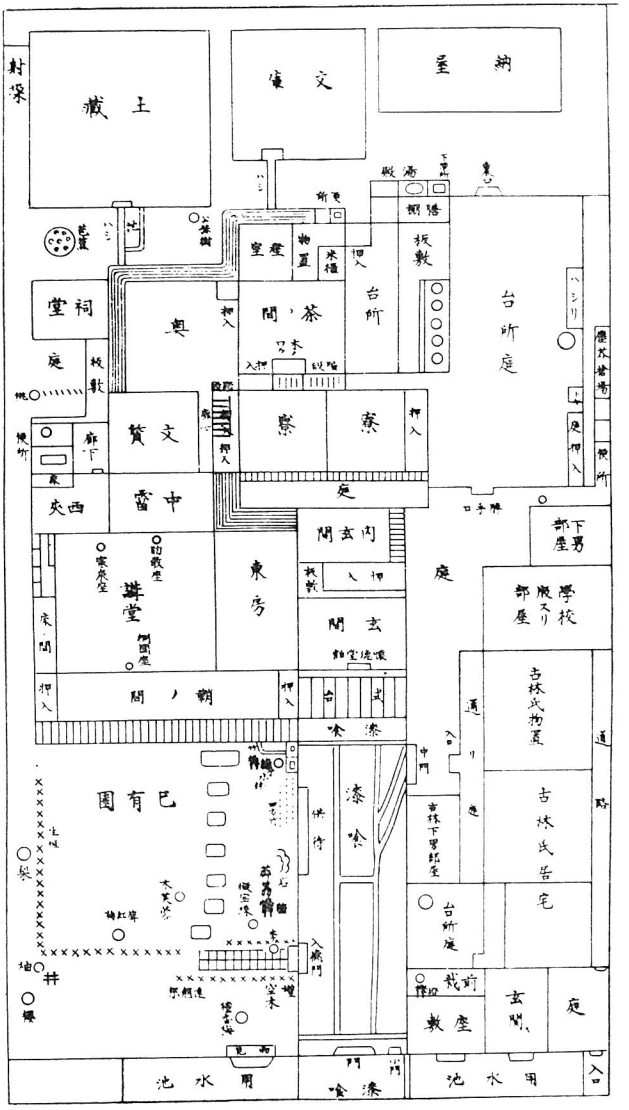
The University of Osaka

懷德堂要覽

舊懷德堂已有園圖竝讚

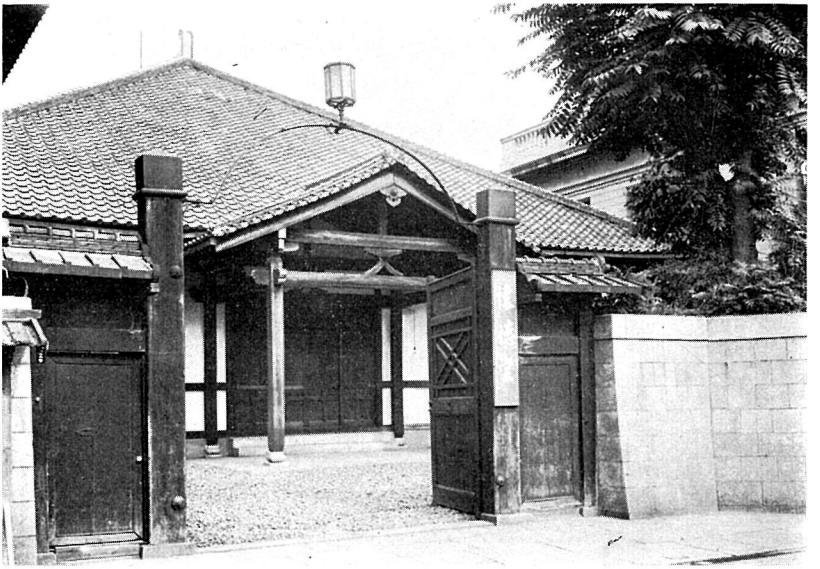
舊懐德堂平面圖

表口十一間半奥行二十間
文賢奥茶ノ間ノ上ニ二階アリ今之ヲ略ス

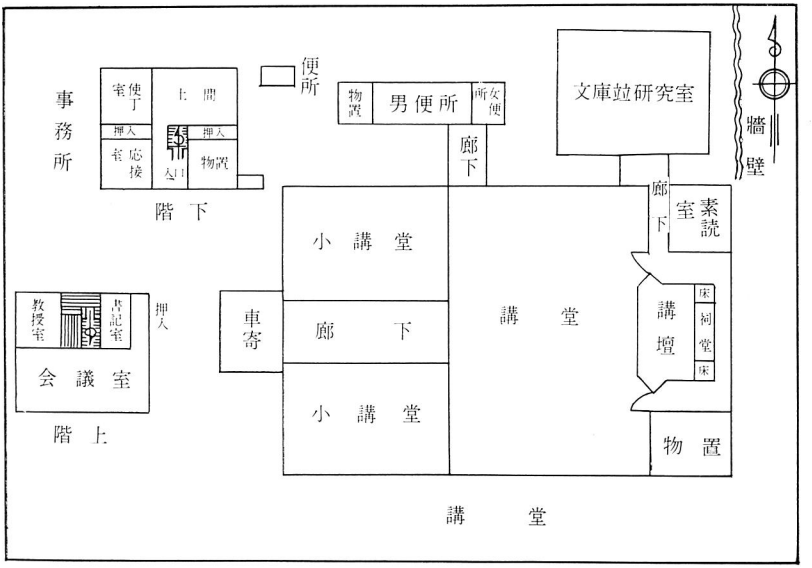


昭和六年八月幼時ノ記憶ヲ辿リテ之ヲ製ス
中井木菟麻呂

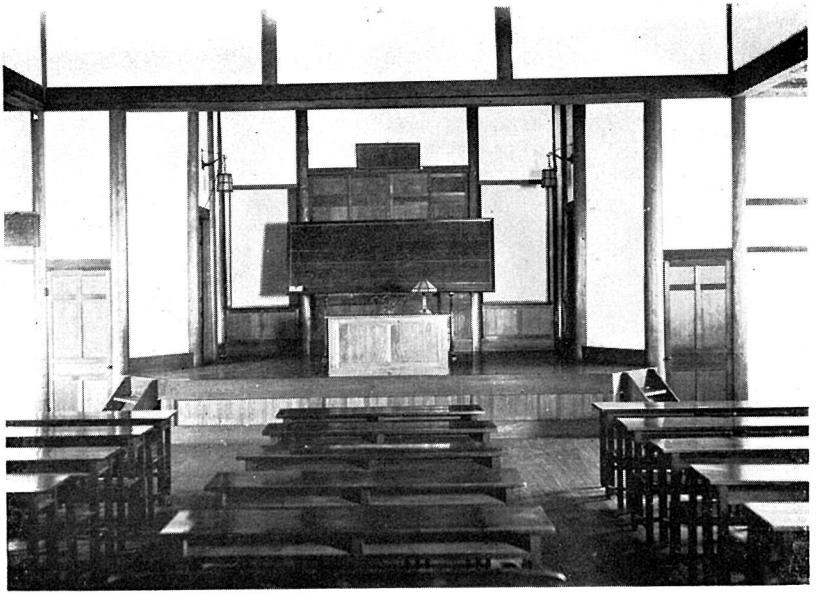
戦災前



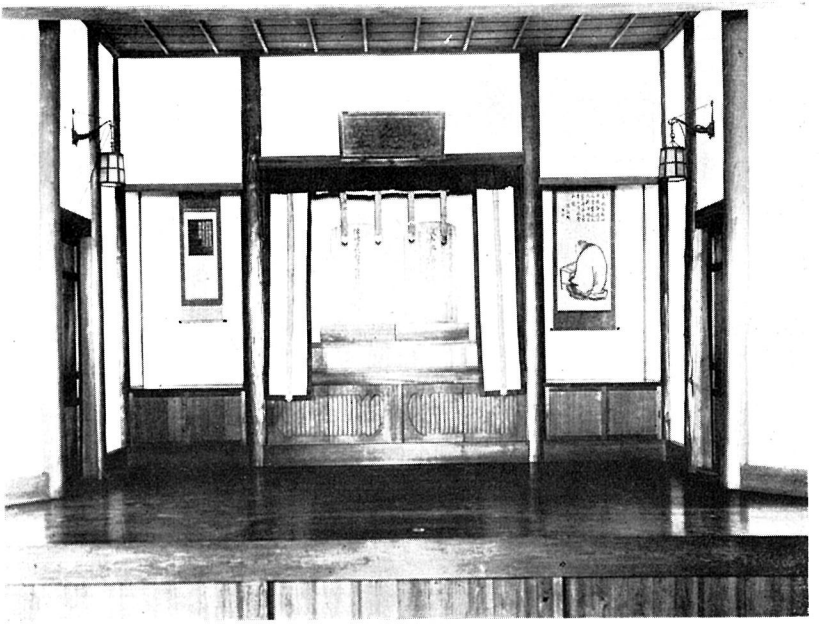
懷德堂玄關



懷德堂平面圖



懷德堂大講堂



懷德堂大講堂正面祖堂

戦災前

懷德堂要覽

懷德堂要覽目次

懷德堂の沿革

一　舊懷德堂の略史……一

二　懷德堂記念會の沿革——創立より終戰まで……一三

三　終戰後の懷德堂記念會……一八

事業

一　終戰前の事業……四〇

二　懷德堂講座……四三

三　恒祭と記念講演……四三

役員

一　財團法人懷德堂記念會役員……四五

二　委囑……四七

附錄

一　懷德堂記念會の趣旨……四九

二　財團法人懷德堂記念會寄附行爲……五〇

三　懷德堂々友會……五三

懷德堂の沿革

一　舊懷德堂の略史

大阪は古來商業の都會であるが、學問の開けたのも古く、町人文學の隆盛は天下に比を見ないものであった。和漢の學はもちろん、院本、小說、俳諧、狂歌に至るまで、その範圍は廣く、それぞれ特色があり、侮るべからざる勢力があった。いま漢文學研究の方面について見れば、懷德堂が主となり、混沌社が從の位置にあり、伊藤仁齋・荻生徂徠・山崎闇齋などの各派の學問がその背景となっていたといえよう。混沌社その他は暫らくおき、懷德堂は實に享保九年（一七二四年・八代將軍吉宗）に創立され、明治維新の際に廢絕されるまで、時に盛衰を免れなかったとはいえ、大阪の文敎を維持すること實に百數十年の久しきにわたった。三宅石菴・中井甃菴に始まり、中井竹山、履軒に盛となり、その學派の分布において、またその勢力の盛なることにおいて、昌平黌に次ぐものがあった。學校創立の年月において懷德堂より早いものとしては、長崎に立山書院あり、岡山に閑谷黌あり、幕府に昌平黌あり、肥前に東原庠舍があるが、懷德堂が商業地の大阪に起り、久しきにわたって倫常の道の究明に盡したことは、まことに誇るに足る事實ではないであろうか。

懷德堂の創立についてみると、その前身に多松堂がある。中井甃菴が三宅石菴に入門してから、甃菴の同門の

三星屋武右衛門・道明寺屋吉左衛門・舟橋屋四郎左衛門らと謀り、醵金して今の安土町二丁目北側に宅を買うて石菴を住ませ、多松堂と名づけて講堂の場所とした。これは正德三年（一七一三）のことであるが、數年ののち石菴の希望により高麗橋三丁目にあった学屋三郎右衛門の隱居屋敷に借宅したので、享保四年（一七一九）に多松堂も賣拂われたが、この頃から備前屋吉兵衛・鴻池又四郎なども入門し、學徒も次第に增加した。たまたま大火にあって石菴が平野に立退いたために、前記の武右衛門（中村睦峰）・吉左衛門（富永芳春）・四郎左衛門（長崎克之）・吉兵衛（吉田盈枝）・又四郎（山中宗古）の、いわゆる五同志は、諸同志と謀って、災後の地を尼ヶ崎町一丁目北側（今橋四丁目、日本生命本社）にあった吉左衛門の隱居宅に定め、ふたたびここに講舍を立てた。これ實に享保九年（一七二四）五月のことである。講舍は表口六間半、奥行二十間であった。これを懷德堂と名づけたのは、論語の里仁篇の「君子懷德」の語より取ったものである。十一月、石菴に對して、平野から歸ってここに住み、子弟に教授するよう請うた。

時の將軍は八代吉宗であったが、あるとき近臣に向って、「京大阪にも學問所のようなものを設け、忠孝の筋を說き聞かせたいものであるが、誰か願い出る者はないか」と語ったことがあった。これを聞いた大島近江守は、城中より歸宅して父の古心に告げたが、古心はこれを親しい間柄の三輪執齋に語り、誰か心當りはないかと問うた。執齋は「大阪には三宅石菴があり、人々その德に服しているが、かようなことを願出るかどうかは確かでない」と答え、右の趣きを執齋から、かねて知合いの門人甃菴に文通した。

甃菴はこの報らせを得て、諸同志に相談したところ、「もし官許を得ることになれば、現在建てている懷德堂も末永く維持されるであろうし、老師石菴の遺跡も永遠に傳わるであろうから、本望の至りである」と衆議一決

したが、「今これを老師に告げたならば、恐らく許可されないであろうから、しばらく祕しておいた方がよい」ということになり、甃菴が專ら事に當って江戸大阪の間を奔走することになった。その筋の注意もあって、願書は大阪において差出すということになったが、やがて町奉行より甃菴へ、「願意は聞屆けられたが、學校地は諸役を免ぜられるのであるから、學問所を隆盛にし、永く衰退を來たさぬよう勤めよ」という申渡しがあった。これは享保十一年（一七二六）七月のことであり、幕府の官學たる昌平黌の創立の元祿三年（一六九〇）より三十七年後にあたる。さらに當時の懷德堂の東隣にあった尼崎屋の持地の表口五間、裏行二十間を申請して、これも許され、直ちに普請に取りかかり、同年八月に落成した。普請の費用は五同志以下の義金による。かようなわけで懷德堂は最初よりして敷地は恩賜、維持は義金という一種の公立の性質のものであった。一同は石菴を推して學主とし、甃菴を推して學問所預人とした。石菴は以前から學校に居住していたが、以後は甃菴も堂内に居住することになった。

學問所の普請は八月に完成したが、石菴が始めて論語の講席を開いたのは、十月五日である。五井蘭洲が召かれて助教となり、日講に當った。並河誠所、井上赤水も一時講を助けたのであるが、誠所は享保十二年（一七二七）の四月に東へ歸り、ついで蘭洲も東遊の途についた。このため石菴も享保十二年の夏頃から日講を手傳ったが、十三年の春に止めたので、井上赤水一人となった。そこで隔日の講に改め、從來主として學校の事務を管理していた甃菴も、專ら講說に從事することになった。三輪執齋は石菴の親友であり、懷德堂創立の動機を作った人であるから、京都から大阪に來た際に臨時の講を開いた。石菴の沒後には、伊藤東涯をも招請して講筵を開いたといわれる。

石菴が享保十一年（一七二六）十月に、懷德堂の玄關にかけた壁書三ヶ條は、庶民教育に重きをおくことと、大阪町人の事情を參酌することとに、意を用いている。その文に

定

一、學問は忠孝を盡し職業を勤むる等之上に有之事にて候、講釋も唯右之趣を說すすむる義に候へば、書物不レ持人も聽聞くるしかるまじく候事。

但不レ叶用事出來候はゞ、講釋半にも退出可レ有レ之候。

一、武家方は可レ爲二上座一事。

但講釋始り候後出席候はゞ、其差別有之まじく候。

一、始めて出席之方は、中井忠藏（甃菴をいう）迄其斷可レ有レ之候事。

但し忠藏他行之節者、支配人道明寺屋新助迄案內可レ有レ之候。

以上

午十月　學問所行司

とある。そして創學當初の教科に關しては、懷德堂內事記に、

一、日講の書は、四書、書經、詩經、春秋胡傳、小學、近思錄

一、毎月望、同志會合、老先生象山集要之講、右者毎年正月十五日初會にて、同志中燕集、老先生初講有レ之、後有レ故毎月之會は十六日に改む。

とある。これによると日講の書はいずれも程朱の學であるけれども、石菴の正月初講および毎月の講釋は陸子の

學である。要するに最初の懷德堂は朱陸併用であり、外朱內王であった。四書五經および道義の書に屬しない雜書を講ずることや、或は表立って詩文を講ずることは、定約によって禁じていたもののようである。

石菴は懷德堂創立後、僅かに四年後の享保十五年（一七三〇）七月に病歿した。石菴の歿後、甃菴が懷德堂の學主となり、學問所預人の名義をも兼ねることになった。甃菴は實に懷德堂創立の功勞者である。創學を願立てるために徒歩で江戸に往復すること前後六回、中ごろ江戸で大患に罹ったけれども屈することなく、ついにその志を達した。その上、石菴の高弟として學德共に長じた者として、甃菴に及ぶものはない。思想傾向の同じくない學者を招聘するよりも、甃菴に石菴の後を繼承させたのは、情理からいって當然であろう。以後、中井・三宅の二家は、その宅を入れ易えて住むことになった。初め石菴と甃菴とが共に堂中に住んでいた頃は、いずれも客分のかたちで、普請造作や賄方までも一切五同志が引受けたのであるが、甃菴の代になってからは世話人が大いに減り、萬事もとのようにならなくなったため、甃菴は五同志の中で殘った富永芳春、吉田盈枝、山中宗古の三人と協議し、學校の事一切を甃菴一人で引受けることとした。ここに至って懷德堂維持の制度は一變することになった。

そのうち創學二十餘年を經て、堂舍も老朽して維持し難くなったので、甃菴は心を決して新築を思い立ち、大工たちに向って、「學校資金の余裕ができるのを待って工事を起したのでは、自分の存命も覺束ない。まず普請を完成させ、のち五年を期限として追々に支拂うことにしたい」と告げたところ、大工たちは甃菴の人格に心服していたこととて、爭って仕事につき、「學校は後世の模範であるから、堅固にすることは我等の面目である。賃銀などは問う所でない」といい、手を揃えて夜を日に繼ぎ、僅々十餘人の大工であったのに、寶曆元年（一七

五一）の正月に始まり、六月には普請が完成したので、人みなその神速に驚いたという。甃菴は時に年六十である。ここにおいて堂舍一新して、見ちがえるほどの壯觀を呈することになった。しかも節省儉約した結果、工費數百金を期限通りに支拂うことができた。この大土木工事が完成したのは、鴻池又四郎のような篤志家が少からぬ寄附をしたことにもよるが、しかし甃菴の篤志と才能とがなかったならば、その實現を見ることはなかったであろう。甃菴が大阪の文教を裨益した功績は決して忘れるべきではない。甃菴が德性を重んじ、實踐を尊んだことは以上に述べた通りであるが、著述はその好むところではなかった。寶曆八年（一七五八）六月に歿した。二男があり、長は竹山、次は履軒である。

甃菴歿後の學主としては、五井蘭洲を推すのが當然であった。蘭洲は大阪に生まれ、甃菴はその唯一の益友である。懷德堂創立の初め、講師を求めるに當り、甃菴は「蘭洲が承諾しなければ、書院はないにも等しい」と說いたので、蘭洲も講師を承諾し、これによって始めて講を開いたほどであった。その後、蘭洲は江戸に遊ぶこと十餘年にして大阪に歸ったが、甃菴は病氣がちで日講も絕々の有樣であったので、蘭洲は徐々に學規の振興を說き、甃菴もまた喜んで教授を助けることを請い、ふたたび懷德堂に助教として經書を講ずることになった。そこで蘭洲は住居を歸阪後五年の寬保三年（一七四三）九月に堂中へ移した。しかし蘭洲は年すでに老い、そのうえ表面に立つことを好まなかったので、三宅春樓が先師石菴の子であるところから學主となり、中井竹山が預人となった。世の懷德堂を說く者は、重きを石菴と甃菴とに置いて、蘭洲の功績を知る者は稀れである。蘭洲は懷德堂において常に助教の地位に甘んじて、一たびも學主や預人にはならなかったとはいえ、懷德堂の教育に關し、或はまた大阪文學の根柢を養ったことに關しては、その功績は却って石菴や甃菴の上にある。

蘭洲は經書を學徒に講ずること二十年に及んだ。初め石菴が堂規を掲げたときは、無緣の人がみだりに講席に入ることを禁じていたのであるが、蘭洲が江戸から歸ったのち、尼ヶ崎町の年寄の川井立牧から、無緣の人にも聽講させられては如何との申込みがあった。そこで蘭洲の意見で、町内だけは無緣の人でも差支えがないことに定めた。ここに至って懷德堂の講義は半公開のかたちとなった。次に席順のことであるが、最初の壁書きには武家方は上座たるべき事とあったのを、

一、書生の交は貴賤貧富を論ぜず、可レ爲二同輩一事

但し大人小子の辨は可レ有レ之候、座席は新舊長幼學術の淺深を以て面々可レ被レ致二推讓一候

と改め、階級制度の嚴重であった時代に學問上は貴賤貧富の差別を認めず、士民平等の思想を表明したのは、懷德堂の特色を見るに足るものがある。次に注目してよいのは、寶曆八年（一七五八）八月の、蘭洲らが連署する懷德堂附記である。舊約定では、學主の任は父子相續を許さなかったのであるが、附記では、學主の死後、適當な人を求め難くて、その子弟に相應の人があれば、相續しても差支えがないことに改めた。また舊約では、學主・預人（公務）、支配人（町役）を置くことになっていたが、支配人は無用であるところから、學主は教導を司り、預人は公務を引受けることとし、學主預人を兼ねるを許さないことに改めた。さらに講師・助講を記して、學德ある人を招請して講談を依頼すべきであるとし、次の一條がある。

一、四書五經道義の書而已講談いたし、他の雜書講候事一切無用と申義に候へ共、餘力に詩賦文章或は醫師をも心懸候人へ、內證にて講じ聞せ、或は會讀にいたし、或は詩會文會等致候事は格別の義と存候、萬年も內證にて醫書詩集等講じ聞せ候事も有之候、但し表向の講談に致間敷事は定約の通可レ爲二勿論一候

舊約では人寄せのために詩文を講ずることを禁じ、從來の懷德堂は道學を主とし、これによって風教を正しくすることを、期していたので、觀るべき文華はなかったのであるが、蘭洲になってからは學力の根柢も深く、詩文にも長じていたところから、華實を共に兼ねようとして學規を改めるに至ったことは、懷德堂の學風の一變と言えよう。他日、竹山や履軒などの經學文章が盛大を極めて、海内の欽仰するところとなったのは、その由來する所があったと言える。蘭洲は寶曆十二年（一七六二）三月、、歿した。時に竹山は三十四、履軒は三十一であったが、すでに鬱然として一家を成していたのは、まことに蘭洲の恩によるものであった。

これよりさき寶曆七年（一七五七）八月、三宅春樓は大學の講義を開いたが、同じく九年に蘭洲が中風に罹ったので、代って易傳を講ずるようになった。中井竹山は預人であるから、その專職は公務にあったけれども、學主の春樓が病身であったために、臨時に易傳の助講をしばしば勤めた。寶曆十一年九月以後、竹山は二七の朝講を引受け、その後蘭洲も物故したから、預人を以て教授を兼ね、近思錄その他の諸書を講じたという。春樓は學主たること二十五年で、天明二年（一七八二）十月に歿した。春樓の歿後、竹山は代って學主となり、預人を兼ねた。春樓が學主であった間は、竹山は預人であり、後輩であったために、意のままにならず、教授の傍ら著述に從事して儒法を守っていたが、ここに至って學校建立の趣旨に立ち返り、儒風を振興すべきことを述べ、諸同志もその意見に從った。竹山は學問の宗旨を明らかにするために、まづ白鹿洞學規を巨板に新刻し、開講の日にこれを講堂の楣上に掲示して、これによって程朱の學を標榜した。これより二七の朝講は尙書、夜講は近思錄を講義し、その他に伊洛淵源錄の會談を行い、大學を開講し、左傳の會讀を始め、さらに詩會をも開くことになり、朔日および十五日の休日の外は、間斷なく學課を督勵したから、積弊一洗して學風大いに振い、生徒の學業も日に進み、

隆盛を一世に謳われるに至った。

寛政四年（一七九二）五月、大火のために懐德堂も全部類燒し、主要な同志も火災に罹らないものはなかった。竹山の生涯をかけての念願は學校の再建である。享保の前例もあることとて、公儀普請を願うのほかなく、かつこの機會に學校を擴張しようと思い、城代の堀田侯に内願し、堀田侯の賛同を得て、樂翁公および松平和泉守、堀田相模守などに出入して學校の再興を願出たところ、いずれも舊交の諸侯であったから願意を聞きおかれ、一まず大阪に歸り表立ちて町奉行に願出でよとの沙汰があった。そこで直ちに町奉行に願出でたところ、この年は何の事もなかったが、翌五年三月、學校繪圖面を差出すべしとあった。よって懐德堂の元の敷地二百三十坪の上に添地を願い、聖廟・拜殿・文庫・教授住宅などの建築を豫定した繪圖一枚と、聖廟などは取り止めて、元の敷地のままで、講堂・學寮などを增建することを豫定した繪圖一枚との、合せて二通を差出した。しかし再三にわたって見積りの變更を命ぜられ、減額に減額を重ねた末、哀願によって得たものは、僅々三百兩の補助に過ぎなかった。所詮、豫定の校舍再築は出來難かったけれども、寛政七年（一七九五）八月、工事に着手し、まず學校より始め、次に門塀、次に玄關講堂、東西房に及び、次第に建設して、翌八年七月に竣工した。工費總計は七百餘金に及んだのに、公金三百兩の外は、同志門人の働きにより滯りなく濟んだのは、竹山の學德力量によるものである。思うに甃菴の寶曆度の講舍改築とならんで永く銘記すべき事柄である。

寛政八年（一七九六）に學校再建が成就して、竹山の志が成るとともに、長子の蕉園の天才が人に絶し、學業も大いに進んだので、翌九年八月を以て竹山は隱退を告げ、蕉園に家名を相續させた。もっとも學主はやはり竹山で、學校預人の名義を蕉園に讓っただけである。しかし蕉園は享保三年（一八〇三）八月に逝き、竹山もまた蕉園

病歿の翌年である享保四年、卽ち文化元年（一八〇四）二月に懷德堂の正寢において歿した。その遺言により竹山の弟で、和泉町の水哉館にあった履軒が、月々の四九の講席だけを受持つことになった。ここに再び履軒と懷德堂との關係を生ずることになったわけである。元來、履軒も竹山と同じく幼い時から懷德堂に育ったのであるけれども、二男のこととて壯年の時代は表面學校の事に携わったことはなかった。ただ竹山の不在中は一時的に學校の世話をしたが、しかし履軒はもともと永哉館を本據として獨立していたので、文化元年に竹山が逝去するまでの三十六七年間は、懷德堂には全く關係しなかった。履軒の懷德堂における講經が何年まで繼續したか、記錄はない。要するに懷德堂は、竹山死しても履軒が嚴然として存していた間は、江戸の昌平黌と對峙して關西唯一の學府の重鎭であった。

竹山歿後の懷德堂は、別に學主を置かないで、預人と教授とから成り、教授は履軒であったが、預人兼教授であったのは竹山の第七子の碩果であった。竹山や履軒の盛時を繼いで、懷德堂の名聲を赫々たらしめることは、何人も困難を免れない。中井碩果は、この困難な時代の繼承者となったので、家學を謹み守り、既成の業を保持することに務め、自らを高く持して四方の俗儒と交遊することがなかった。懷德堂の學風は、ここに至ってまた一變することとなった。

文政八年（一八二五）六月には、懷德堂が幕府の官許を得た創學一百年に當るので、その旨を屆出たところ、町奉行より、緒を承けること永くして先業を失墜しなかったことを賞し、これを將來に傳えて永世變ることがないよう、戒めるところがあった。碩果は天保十一年（一八四〇）三月、病歿した。これよりさき、甥の並河寒泉を養うて嗣とし、碩果は教授、寒泉は學校預人となったが、のち寒泉が本姓に復したので、さらに從弟柚園の子桐園

を養嗣とした。碩果の歿後は、桐園は學校預人となり、寒泉は教授となった。

寒泉と桐園とが懐德堂を管理したのは、天保十一年（一八四〇）より、明治二年（一八六九）に至る三十年間である。寒泉の學問は、專ら程朱を尊奉して多岐に渉らず、門下生には經史の兼習を課し、諸子の學を好まなかった。また實學實行を主とし、文華に走り德行に疎遠になることを嫌った。要するに、碩果の時から閉鎖退嬰の方針を採るようになり、寒泉・桐園みなその風を守り、學校の中に割據するかたちとなったのであるから、竹山時代の懐德堂が大學としての性格をもっていたのに對して、ここに至って名實共に一鄕校となったわけである。然しながら歷代傳えられた儒學の業を繼承し、學風の純粹を期して、人々に正學の在る所を知らしめ、歸趨する所あらしめたのは、世道人心に少からず裨益したものといえよう。そして懐德堂の最後を飾る事業として、寒泉・桐園が力を盡したのは、文庫の建築、逸史の出版、聖廟の創建などの企てであった。伏見鳥羽の戰があって、大阪も人心恟々たるものがあったので、懐德堂も一時休業したことがあるが、やがて騷亂も靜まったので、以前のように教授を始めた。この頃において特筆すべきことは、明治元年に山階宮晃親王が懐德堂に來臨されたことである。

王政維新の後は、學問上にも大影響があって、新しきを尊び古きを厭う時代の傾向は、やがて洋學の天下をもたらした。懐德堂も門前の雀羅を如何ともすることができず、もはや頽勢の挽回しがたいのを知り、校門を閉したのは明治二年（一八六九）十二月であり、ここに一時廢絕のやむなきに至った。懐德堂創立の享保九年（一七二四）を去ること百四十六年である。（西村時彦氏懐德堂考による）

二　懷德堂記念會の沿革——創立より終戰まで

懷德堂の學徒離散し、絃誦の聲を絶つこと四十年にして、ここにまた復興の機運が開けることになった。その端緒は大阪人文會に發する。人文會は前大阪府立圖書館長今井貫一氏の首唱によるものであり、大阪人文の發達を研究調査し、文化と風教とに貢獻しようとする在阪好學の士から成ったものである。

明治四十三年（一九一〇）一月、會員西村時彦氏が、その例會において、懷德堂教授であった五井蘭洲の傳を講演したところ、講演が終ってのち、懷德堂の師儒諸先生のために公祭を擧行したいとの議が、期せずして衆口より出で全會一致でこれを可決した。これよりさき、中井竹山の曾孫にあたる中井木菟麻呂氏は、重野成齋氏の紹介で、大阪市史編纂員幸田成友氏と共に西村氏を訪ね、懷德堂公祭の件について相談したが、時いまだ到らないで中絶のかたちであった。ここに至って人文會が主唱實行の任に當ることになったのは、會員全體の篤志から出たものである。これが實に懷德堂復興の濫觴であり、また現在の懷德堂記念會創立の發端である。人文會の決議は、「懷德堂は幕府の保護と、志ある市民の協力によって成った公立の學問所である。したがって公祭は大阪人文會の私すべきものではなく、大阪府教育會はもちろん、懷德堂に緣故の深い鴻池善右衞門氏、住友吉左衞門氏を初めとして、同志の紳士に發起人となることを請うべきである」というのであった。そこで同年九月、西村時彦氏は會の決議をもたらして歷訪勸誘したところ、みな深厚な同意を表し、この擧が世道人心に大きな影響を與えるものであるから、ふるって發起人の責任に當ろうという快諾を得た。かくて九月二十五日、發企人會を開き、その互選により、住友吉左衞門氏を會頭に、小山健三氏を副會頭に推し、會則を定め、會名を懷德堂記念會とし

た。かようにして會が成立するとともに、まずこれを中井家遺族および縁故ある人々に通知し、會の趣旨とする報本反始の意を明らかにした。ついで新聞紙上で會の成立を廣く一般に告げ、また學術講演會を開いて會の趣旨の普及をはかり、あまねく有志の入會を勸誘した。その結果、南は九州、北は北海道にわたるまで會員を得、特別會員六百二十二名、普通會員一千三百七十名の多きに登った。

明治四十四年十月五日、懷德堂開講記念日にあたり、大阪市公會堂を祭場とし、儒禮に從って祭典を行った。六日、七日の兩日は、東西兩大學の碩學を招聘して記念學術講演會を開き、同月一日より六日までは中井家を始めとする諸家襲藏の懷德堂先賢遺書遺物を展觀した。さらに懷德堂師儒の遺著十種（萬年先生論孟首章講義、甃菴先生五孝子傳、富貴村良農事狀、竹山先生蒙養篇、貞婦記錄、蘭洲先生茗話、勢語通、竹山先生奠陰集、國字牘、履軒先生論語逢原）を選擇編纂して、懷德堂遺書と題し、記念刊行した。

明治四十五年二月、竹山中井善太先生に從四位が贈られた。同年三月、剩余金六千餘圓の處分協議會を開き、剩余金を基本資產とし、本會と同一の目的のもとに、さらに法人組織の懷德堂記念會を創立することを決議し、五月に至って委員の手になる寄附行爲案の脫稿を見たが、設立者の推薦に時日を費していた時に、あたかも明治天皇の崩御にあい、延期となった。大正二年六月に至り、協議會を開いて寄附行爲案を可決し、財團法人懷德堂記念會設立者として、永田仁助氏、西村時彥氏、今井貫一氏、水落庄兵衞氏、廣岡惠三氏を推し、同月三十日に法人設立を出願し、八月二十日に許可された。よって前記の五氏が理事となり、永田仁助氏を理事長に選擧し、九月一日に法人登記を得た。當時起草された懷德堂記念會の趣旨および寄附行爲の規則は、本要覽の附錄一について見られたい。

大正三年三月五日、本會の目的および事業の計畫が天聽に達し、金二百圓が下賜された。十一月、履軒中井德二先生に從四位を贈られた。

大正四年六月、講堂敷地として府立大阪博物場の西北隅にあたる三百六十一坪の無償使用の許可を得て、懷德堂重建の議が決定し、十月地鎭祭を執行した。十一月、東涯伊藤原藏先生に從五位を贈られた。

大正五年九月、懷德堂が竣工した。同月、水落庄兵衞氏は理事を辭し、小倉正恒氏がこれに代った。十二月、廣島高等師範學校教授松山直藏氏を招聘して懷德堂教授とした。これよりさき、十月十五日開講式を擧行し、十一月四日京都帝國大學文學部教授を招聘し、定期學術講演會第一回を開き、これより毎月二回開會することになった。

大正六年一月、會計規則、講義規則を定めた。理事西村時彥氏に講師を囑託す。一月二十七日開講式を行い、松山教授が大學首章を講義した。四月、素讀科を設け、波多野七藏氏に教師を囑託し、五月より講義を開始した。同月、京都帝國大學助教授吉澤義則氏に講師を囑託す。十月十四日記念祭恒典を行う。同日、廣岡惠三氏は理事を辭し、坂仲輔氏がこれに代った。十一月、甃菴中井忠藏先生に正五位を、誠所並河五一郎先生に從五位を贈らる。

大正八年二月、吉澤義則氏は講師を辭し、同月第三高等學校教授林森太郎氏に講師を囑託した。三月、武內義雄氏に講師を囑託し、支那に留學させた。四月、通俗講演規定を作り、六月第一回通俗講演を開く。九月より日曜朝講を開始し、松山教授が擔任した。十一月、石菴三宅新次郎、蘭洲五井藤九郎、寒泉並河復一の三先生に各正五位を贈られた。

大正九年二月、波多野七藏氏が教師を辭し、吉田鋭雄氏を教師とした。十月十日記念祭恒典を行い、かねて本堂先師儒諸先生の贈位を報告す。同月、教育勅語謄本が下附された。十二月、武内講師が支那から歸った。

大正十年一月開講の日に教授が教育勅語を捧讀し、以後毎年の恒式と定めた。同月より定日講義を增加し、日曜朝講を合せて毎週四回とした。同月、文學博士狩野直喜氏、同内藤虎次郎氏に顧問を囑託す。九月、西村時彦氏は理事を辭し、十月、上野精一氏がこれに代った。

大正十一年十月八日午前記念祭恒典を行い、午後孔子歿後二千四百年記念事業として孔子祭を行う。

大正十二年三月、武内義雄氏が東北帝國大學教授に任命された。四月、大阪高等學校教授財津愛象、稲束猛兩氏に講師を囑託す。同月より毎週一回文科講義を開始す。七月二十七日、本會の事業の狀況が天聽に達し、金三千圓が下賜された。十一月、吉田鋭雄氏を講師とす。同月文部省在外研究員を命ぜられ、支那に向った。十二月、孔子歿後二千四百年記念事業の一たる校印論語義疏が完成した。

大正十三年二月、執齋三輪善藏先生に正五位を贈らる。七月三十日、宮内省御用掛にして本會の評議員兼講師である西村時彦氏が歿した。

大正十四年六月、講師吉田鋭雄氏が支那より歸り、助教授となる。同月、懷德堂文科學術講演集、同百科通俗講演集各第一輯成る。八月五日より十二日に至る一週間、支那學講習會を本堂に開く。八月十四日、理事坂仲輔氏歿す。九月七日、故西村博士記念會より、同博士舊藏書全部を碩園記念文庫と名づけて保存するよう、本會に寄贈された。同月十八日、永田仁助氏より漢學奬勵のため、奬學資金五萬圓を寄附された。十一月、重印懷德堂考が成った。

大正十五年六月一日、懷德堂書庫ならびに研究室起工。七日、久邇宮殿下、同妃殿下來堂さる。七月、懷德堂文庫閲覽規則および懷德堂記念會奉祀規定を定めた。十月三十一日、書庫ならびに研究室竣工す。十一月六日、記念祭恒典を執行し、本堂重建後の物故講師西村時彦氏外二名、物故功勞者住友吉左衞門氏外七名の合祀を行い、合せて創學二百年、重建十年の記念式典を擧行す。この日、久邇宮家より金壹萬疋を贈られた。

昭和二年三月十日、理事長永田仁助氏歿す。四月二十三日、教授文學博士松山直藏氏歿す。このため同教授擔任の日曜朝講を廢した。十月九日、理事小倉正恒氏が理事長に就任した。同日、木間瀨策三氏、田中隆三氏が理事となった。十二月十二日、講師稻束猛氏歿す。

昭和四年四月一日、大阪高等學校財津愛象氏を招聘して教授とした。同日、大阪高等學校教授秋月胤繼氏を講師に囑託す。六月四日、今上天皇が大阪に行幸、甘露寺侍從を派遣された。九月一日、大阪高等學校教授佐々木恒清氏を講師に囑託す。十月十日、野々村政也氏が理事に就任した。同月十二日、記念祭典を行い、併せて物故教授松山直藏氏、講師稻束猛氏ほか四名、ならびに物故功勞者永田仁助氏を合祀した。

昭和五年三月五日、理事田中隆三氏が辭任した。四月二十四日、理事野々村政也氏が歿した。

昭和六年十月四日、教授財津愛象氏が歿した。十月十日、江崎政忠氏が理事に就任した。

昭和七年九月十日、岡山源六氏を講師に囑託す。これより定日講義を毎週四回とした。四月十三日、第三高等學校教授阪倉篤太郎氏を講師に囑託す。九月二十二日、中井木菟麻呂氏より舊懷德堂遺物の一部四十七點の寄贈を受けた。

昭和九年三月三十日、文科講義を廢止した。四月一日、武藤長平氏を講師に囑託す。これより定日講義を毎週

五回とした。但し通俗講演の當日は休講のこととする。四月十四日、滿洲國國務總理大臣鄭孝胥氏が來堂した。六月二十六日、顧問內藤虎次郎氏が歿した。

昭和十年十二月十九日、東久邇宮殿下が來堂された。

昭和十一年四月十四日、北平淸華大學敎授劉文典氏が來堂し、十日間にわたり碩園文庫の楚辭について研究した。八月十七日、滿洲國前國務總理大臣鄭孝胥氏が書を小倉理事長に寄せ、金參千圓を本堂基金として寄附された。十月一日、西村時彥氏遺著碩園先生遺集五册を印行した。同月十日、記念祭典ならびに重建二十年式典を行い、併せて物故敎授財津愛象氏、顧問內藤虎次郎氏、講師佐々木恒淸氏ほか六人、ならびに物故功勞者鴻池善右衞門氏ほか四人を合祀した。

昭和十三年一月二十二日、講師武藤長平氏が歿した。四月より定日講義を每週四回とした。五月七日、講師岡山源六氏が歿した。七月二十日より八月五日まで、日曜日を除く十五日間、第一回支那語講習會を開いた。

昭和十四年二月一日、大江文城氏を講師に囑託す。三月十四日、中井木菟麿氏より舊懷德堂および水哉館の遺書遺品三百十五點の寄贈を受けた。七月一日より八月五日まで每週火、木、土曜の十五日間、第二回支那語講習會を開く。七月八日、伊藤介夫氏遺族より履軒先生手書後漢書雕題ほか五十餘點の寄贈を受けた。十一月一日、定日講義は十一月より三月までは午後六時半より同八時半まで、四月より十月までは午後七時より同九時まで、土曜および通俗講演は、十一月より三月までは午後六時半より同八時まで、四月より十月までは午後七時より同八時半までと變更した。

昭和十五年一月十二日、懷德堂印存が成った。三月十八日、理事今井貫一氏が歿した。七月二日より八月三日

まで毎週火、木、土曜の十五日間、第三回支那語講習會を開く。十月十二日、古田俊之助氏が理事に就任した。十一月十九日、皇紀二千六百年奉祝式を大講堂で擧行した。

昭和十六年一月十四日、關西學院教授張源祥氏を講師に囑託し、定日講義中に支那語科を加えた。これより定日講義を毎週五回とした。十月十一日、記念祭典ならびに重建二十五年式典を行い、併せて物故講師林森太郎氏ほか四名、物故功勞者藤田平太郎氏、今井貫一氏を合祀した。

昭和十七年九月、重建二十五年記念事業として中井竹山先生著草茅危言五册を印行した。

（昭和十八年より十九年に至る間は、戰災による記錄燒失のため不明。）

昭和二十年三月十四日、戰災に罹り、書庫を除く講堂、事務所等を擧げて燒亡した。七月十日、書庫內研究室において開講式を擧行し、終って大江講師の「論語の仁に就て」の講話があった。同月十四日より毎週二回定日講義を開始した。

三　終戰後の懷德堂記念會

太平洋戰爭は、懷德堂に對しても重大な影響を及ぼした。終戰直前の昭和二十年三月十四日、大阪が空襲を蒙った際、懷德堂は講堂と事務所とを擧げて燒失し、書庫一棟のみがわずかに災を免れた。これがその大きな災害の一つである。しかし更に大きな損害は、戰爭の直接間接の影響も與って、役員、教授、講師に戰病死者が相踵いだことである。田中隆三理事、成田軍平幹事、大塚末雄講師、秋月胤繼講師、松本文三郎講師、大江文城講師の病歿、新美寬講師の戰死、狩野直喜顧問、吉田鋭雄教授の病歿等は、皆終戰前後に起った不幸であった。かく

て、これ等の原因によって、講義の續行は殆んど不可能な狀態に陷ってしまった。その上更に、大阪の焦土化に伴って、堂の支持者の中樞であった堂友會員の四散があり、また戰後のインフレ昂進に伴って、堂の基金の無價値化があったことは勿論である。かくて今やこの事態に對する善後措置が當面の問題となったが、一方、戰後の復興に伴って、大阪の諸大學には文學部の增設されるものがあり、また新に新制大學の設置も相前後して起った爲め、大阪地方の文教事情が大きく變化し、それに適應して、懷德堂の在り方も、當然一新すべき時機に立ち至った。そこで理事會は愼重審議の末、燒亡を免れた藏書三萬六千餘册を大阪大學に寄附し、今後の事業は阪大と共同で行う方針を定めた。阪大はこれを承諾し、昭和二十四年十二月二十六日、先づ懷德堂文庫の寄附を完了した。戰後の事業はこの時から始まる。

昭和二十一年四月、事務所竣工。五月より定日講義を每週一回とし、別に每月一回の萬葉集の講義を開始。十月五日、記念祭恒典、合祀祭、並に重建三十年の式典を執行、合祀者は理事田中隆三、評議員大久保利武、幹事成田軍平、講師大塚末雄、講師秋月胤繼、講師大江文城、講師松本文三郎の七先生である。終って府立貿易館講堂で、東方文化研究所研究員吉川幸次郎氏の「論語の子曰由誨女知之乎の章に就て」と題する記念講演があった。

昭和二十二年八月二十日、講師大江文城先生の遺族より藏書約二千三百册の寄贈を受けた。十月十八日、記念祭恒典執行、終って講師武內義雄氏の「朱子の孝經刊誤を讀みて」と題する記念講演があった。十二月十三日、顧問狩野直喜氏逝去。

昭和二十三年四月、吉田鋭雄助教授を教授とした。五月二日、講師武內義雄氏を顧問に囑託。五月十二日、吉

田鋭雄教授逝去。六月より定日講義を毎月一回の萬葉集のみとした。九月二十四日、大阪大學學長今村荒男氏理事に就任。十月九日、記念祭恒典並に合祀祭を執行、合祀者は顧問狩野直喜、教授吉田鋭雄、講師天沼俊一、講師新美寛、功勞者荒木寅三郎の五先生である。終って東方文化研究所研究員平岡武夫氏の「經書の傳統」と題する記念講演があった。十二月二十七日、愛甲勇吉氏より先考寄託の書籍六千八百册の寄贈を受けた。

昭和二十四年十月十九日、記念祭恒典を執行。終って京都大學人文科學研究所教授貝塚茂樹氏の「孔子の年代」と題する記念講演があった。十二月二十六日、懷德堂文庫藏書三萬六千餘册を大阪大學へ寄贈した。

昭和二十五年十月七日、記念祭恒典を書庫内において執行、大阪大學教授木村英一氏の「儒學の傳統」と題する記念講演があった。十一月一日、大阪大學教授木村英一、同桑田六郎、同小島吉雄、同藤直幹、大阪市立大學教授神田喜一郎、同内藤乾吉、京都大學教授吉川幸次郎、同人文科學研究所長貝塚茂樹、關西大學教授石濱純太郎の九氏に、事業運營委員を囑託した。十一月六日、午後一時より、大阪大學醫學部大講堂で、大阪大學主催懷德堂記念講演會が開かれ、懷德堂先賢の遺品が展觀された。演題および講師

現代の學問と懷德堂　大阪大學教授　木村英一

町人の學問　同　右藤直幹

懷德堂の經學　懷德堂顧問　武内義雄

同日、第一回事業運營委員會を開き、毎年春秋二季に、六日間づつ、毎夜、懷德堂講座を開き、春季を古典、秋季を其他の講座とすることを決議した。

昭和二十六年五月二十一日より同二十六日まで、大阪大學醫學部第二講堂において、第一回懷德堂講座を大阪

大學文學部と共同主催にて開催、大阪市立大學法文學部、朝日新聞社等の後援を得た。演題および講師

漢字文化の過去と現在	大阪大學教授	木村英一
アメリカ人の見た孔子	京都大學教授	貝塚茂樹
儒教の道德とその將來	懷德堂顧問	武內義雄
懷德堂の文藝	大阪市立大學教授	神田喜一郎
大阪を中心として見た儒醫	武田藥品研究所	渡邊幸三
杜甫の文學	京都大學教授	吉川幸次郎

十月六日、書庫內において記念祭恒典を執行、終って關西大學教授石濱純太郎氏の「町人の學問」と題する記念講演があった。十月八日より十三日まで、大阪大學醫學部第二講堂において、第二回懷德堂講座を開催した。演題および講師

歐亞大陸北部を通じての古代東西文化の交流（幻燈使用）	京都大學教授	梅原末治
香料の源流	小川香料店	山田憲太郎
東西交通上の南洋	大阪大學教授	桑田六郎
法生活上より見たる東洋と西洋	大阪市立大學教授	谷口知平
天文曆法より觀たる東西文化の比較	大阪學藝大學教授	能田忠亮
古代醫學の東西（幻燈使用）	大阪大學教授	木村康一

十一月三日、本會は文化功勞者として大阪府教育委員會より表彰され、「なにわ賞」を受けた。十二月二十七日、

理事江崎政忠氏逝去。

昭和二十七年五月二日、評議員森平兵衞氏逝去。五月二十六日より三十日まで、大阪大學醫學部第二講堂において、第三回懷德堂講座を開催した。演題および講師

老子	大阪大學教授　木村英一
能樂の詞章としての謠曲	懷德堂講師　阪倉篤太郎
日本書紀について	京都大學名譽教授　西田直二郎
中庸	懷德堂顧問　武內義雄
蘇東坡の詩について	京都大學教授　小川環樹

十月六日より十一日まで、大阪大學醫學部第二講堂において、第四回懷德堂講座を開催した。演題及び講師

天平時代の藝術	大阪市立美術館長　望月信成
中國の美術	神戸大學教授　小林太市郎
雲崗の石佛	京都大學教授　長廣敏雄
現代書道の趨勢	書家　辻本史邑
印度・ペルシヤの細密畫	京都大學教授　上野照夫
ギリシヤの彫刻	大阪大學教授　村田數之亮

十月二十五日、書庫內において記念祭恒典を執行、終って國立京都博物館長神田喜一郎氏の「竹山先生の文學」と題する記念講演があった。

昭和二十八年二月六日、評議員廣岡惠三氏逝去。三月二十三日、理事古田俊之助氏逝去。五月二十五日より三十日まで（二十七日を除く）五日間、大阪大學醫學部第二講堂において第五回懐德堂講座を開催した。演題および講師

詩經	大阪大學教授	木村英一
老子	懐德堂顧問	武内義雄
近松と日本の演劇	大阪大學教授	小島吉雄
史記屈原傳	大阪市立大學教授	橋川時雄
春秋	京都大學教授	重澤俊郎

十月五日より十日まで、大阪大學醫學部第二講堂において、第六回懐德堂講座を開催した。演題および講師

明治の精神と啄木	關西學院大學教授	高坂正顯
明治初期の官僚	京都大學教授	坂田吉雄
明治の女性	同志社大學教授	石田一良
日本經濟の發展と外資	京都大學教授	堀江保藏
明治醫學の一隅	大阪大學名譽教授	古武彌四郎
明治の漢詩壇	國立京都博物館長	神田喜一郎

十月二十四日、書庫内において記念祭恒典を執行、終って大阪市立大學教授内藤乾吉氏の「日本古代の官制について」と題する記念講演があった。同日、岡橋林、桑田芳藏の二氏理事就任。同日、理事會を開き、本會の事務

所を「大阪市東區北濱三丁目三〇番地」の適塾内に移轉することを決議した。十一月二十四日、右移轉認可の申請書を文部省へ提出。十二月、本月以降、會場の都合により、定日講義（萬葉集講議）を休講した。

昭和二十九年五月二十四日より二十九日まで、大阪大學醫學部第二講堂において、第七回懷德堂講座を開催した。演題および講師

周易　大阪大學教授　木村英一
樂記　關西大學教授　張源祥
尚書　京都大學助教授　平岡武夫
說文　關西大學教授　石濱純太郎
（講師病氣のため缺講）

萬葉集　關西大學教授　澤瀉久孝
水經注　京都大學教授　森鹿三

九月二十一日、本會事務所を大阪市東區北濱三丁目三〇番地（適塾内）に移轉の認可あり、同日移轉した。同時に事務連絡所を豐中市柴原大阪大學文學部内に設けた。十月二十三日、北濱適塾において記念祭恒典執行、終って大阪市立大學教授橋川時雄氏の「中井履軒先生の史記學」と題する記念講演があった。十月二十五日より三十日まで（二十六日を除く）五日間、大阪大學醫學部第二講堂において、第八回懷德堂講座を開催した。演題および講師

アメリカの東洋學　京都大學教授　吉川幸次郎

フランス法學界と日本（幻燈使用）　大阪大學教授　石本雅男
インドの見聞（幻燈使用）——佛蹟と宗教事情——　京都大學講師　藤吉慈海
トルキスタンの民族（幻燈使用）　京都大學教授　岩村忍
慶陵の研究　同　右　田村實造

昭和三十年五月二十三日より二十八日まで、大阪大學醫學部第二講堂において、第九回懷德堂講座を開催した。演題および講師

三禮　大阪大學教授　木村英一
元遺山の史詩　京都大學名譽教授　鈴木虎男
王維の話　立命館大學教授　橋本循
齊民要術と中國の農業　京都大學教授　天野元之助
源氏物語　關西大學教授　島田退藏
中國の辭書類　同　右　石濱純太郎

十月三日より七日まで、大阪大學醫學部第二講堂において、第十回懷德堂講座を開催した。演題および講師

居庸關の遺址　京都大學教授　村田次郎
文人畫について　京都博物館員　島田修二郎
蘇東坡とその書　京都美術大學教授　中田勇次郎

丹波立杭窯の歴史と現狀　關西學院短大教授　武藤　誠

文樂の今昔　醫學博士　高安六郎

十月八日、北濱適塾において記念祭恒典を執行、終って大阪大學教授小島吉雄氏の「懷德堂の和學」と題する記念講演があった。同日、正田建次郎、藏内數太兩氏理事就任、桑田理事退任。

昭和三十一年三月、藏内理事退任、四月、藏内理事の後任として小島吉雄氏就任。五月二十一日より二十六日まで、大阪大學醫學部第二講堂において、第十一回懷德堂講座を開催した。演題および講師

孝經　大阪大學教授　木村英一

天工開物　京都大學教授　藪内清

論衡　大阪大學助教授　森三樹三郎

憶良文學形成の一斷面　名古屋大學教授　高木市之助

元代の演劇　同　右　入矢義高

中國の史書類　關西大學教授　石濱純太郎

十月一日より五日まで、大阪大學醫學部第二講堂において第十二回懷德堂講座を開催した。演題および講師

戰後のイギリス人の生活　大阪大學教授　大阪谷公雄

印度の旅行　京都大學教授　長尾雅人

歐米美術行脚　同　右　井島勉

アフガニスタンで發見の蒙古語文書　同　右　岩村忍

歐米哲學界の印象　　同　右　高坂正顯

十月六日、北濱適塾において記念祭恒典を執行、終って大阪大學教授時野谷勝氏の「寛政期の社會と懷德堂」と題する記念講演があった。十二月十日、木間瀨理事逝去。

昭和三十二年三月十五日、評議員村田省藏氏逝去。四月一日、事業運營委員桑田六郎氏退任。五月二十日より二十五日まで、大阪大學醫學部第二講堂において第十三回懷德堂講座を開催した。演題および講師

論語　大阪大學教授　木村英一

名物雜話　京都大學名譽教授　青木正兒

大學と絜矩之道　武庫川大學教授　後藤俊瑞

抱朴子　滋賀短期大學教授　村上嘉實

源氏物語の女性美描寫について　大阪女子大學々長　平林治德

敦煌について　關西大學教授　石濱純太郎

九月三十日より十月五日まで、大阪大學醫學部第二講堂において第十四回懷德堂講座を開催した。演題および講師

新中國の考古學　京都大學教授　水野清一

中共學界訪問　同　右　重澤俊郎

アメリカの裁判所を巡りて　大阪高裁判事　澤榮三

歐米に於ける東洋學　關西大學教授　高橋盛孝

研究室の窓から
——パリでの——　大阪大學教授　久保秀雄

忘れられぬこと、なつかしい人
——フランスの旅——　同　右　和田誠三郎

十月十二日、北濱本會において記念祭恒典を執行。終って大阪大學助教授森三樹三郎氏の「莊子に於ける自力と他力」と題する記念講演があった。

昭和三十三年三月三十一日、小島理事退任。四月一日、藤直幹氏理事に就任。大阪大學教授守屋美都雄氏に事業運營委員を委嘱した。五月二十六日より三十一日まで、大阪大學醫學部第二講堂において第十五回懷德堂講座を開催した。演題および講師

孟子　大阪大學教授　木村英一

荆楚歳時記　同　右　守屋美都雄

史記　京都大學助教授　田中謙二

殷墟の卜辭について　立命館大學教授　白川静

雨月物語　大阪大學教授　宇佐美喜三八

鹽鐵論　京都大學教授　西田太一郎

九月二十九日より十月二日まで、大阪大學醫學部第二講堂において第十六回懷德堂講堂を開催した。演題および講師

大阪漢學論　大阪大學教授　木村英一

明治初期の大阪を中心とした新聞の發達　朝日新聞社史編集室主任　松浦直治

維新前後における産業都市大阪　大阪大學教授　宮本又次

大阪文藝史の一節　京都大學教授　野間光辰

十月十八日、北濱本會において記念祭恒典を執行、終って大阪大學教授守屋美都雄氏の「中國の古歳時記と日本」と題する記念講演があった。

昭和三十四年五月二十五日より三十日まで、大阪大學醫學部第二講堂において第十七回懐德堂講座を開催した。演題および講師は

爾雅　大阪大學教授　木村英一

萬葉美と風土　同　右　犬養孝

莊子　愛知學藝大學助教授　福永光司

管子　大阪大學助教授　清水潔

周易　大阪市立大學助教授　本田濟

錢謙益の列朝詩集　京都大學教授　吉川幸次郎

九月二十八日より十月三日まで、大阪大學醫學部第二講堂において、第十八回懐德堂講座を開催した。演題および講師

ロビンソンとガリバー　大阪大學教授　村上至孝

テレビによる學習と教育の變革　大阪大學助教授　田中正吾

難波宮址の發掘と昔のナニワ　大阪市立大學講師　山根德太郎
インドの佛蹟　京都大學助手　梶山雄一
社會學の歴史と儒學　大阪大學教授　藏內數太
漢法醫學とベルグソンの哲學　同　右　澤瀉久敬

十月十七日、北濱本會において記念祭恒典を執行、終って京大名譽教授那波利貞氏の「中國の書儀について」と題する記念講演があった。十一月二十四日、理事岡橋林氏逝去。

昭和三十五年三月三十一日、藤理事退任。四月一日、村田數之亮氏理事に就任。五月二十三日より二十八日まで、大阪大學醫學部第二講堂において第十九回懷德堂講座を開催した。演題および講師

荀子と經學　大阪大學教授　木村英一
中國古代法　同志社大學教授　內田智雄
靜齋門の論語學　關西大學教授　壺井義正
詩人蘇東坡　京都大學助教授　倉田淳之助
枕草子　大阪大學助教授　林和比古
敬について　立命館大學教授　笠原仲二

十月十五日、北濱本會において記念祭恒典を執行、終って京都美術大學教授中田勇次郎氏の「わが國における唐樣書道の變遷について」と題する記念講演があった。十月十七日より二十二日まで、大阪大學醫學部第二講堂において第二十回懷德堂講座を開催した。演題および講師

日本佛教と社會　京都大學教授　赤松俊秀
風俗史上より見たる日本中國の交渉　京都女子大學教授　江馬務
初期の日米關係　大阪大學教授　時野谷勝
明治政治史上の二潮流　大阪大學助教授　梅溪昇
日本神話について　大阪大學教授　藤直幹
繪卷について　關西學院大學教授　源豐宗

十一月四日、理事今村荒男、顧問武內義雄兩氏は文化功勞者として表彰された。十二月十六日、理事正田建次郎氏退任。

昭和三十六年五月二十二日より二十七日まで、大阪大學本部松下會館小講堂において第二十一回懷德堂講座を開催した。演題および講師

大學と中庸　大阪大學教授　木村英一
五十而知天命　大阪大學助教授　森三樹三郎
詩經　立命館大學教授　白川靜
平家の歌人　大阪市立大學教授　谷山茂
韓愈の詩文における諧謔について　大阪大學助教授　清水潔
歐米に於ける教養と古典　同　右　扇谷尙

十月十四日、北濱本會において記念祭恒典を執行、終って大阪大學教授藤直幹氏の「日本文化における禮的なも

の」と題する記念講演があった。十月十六日より二十一日まで、大阪大學本部松下會館講堂において第二十二回懷德堂講座を開催した。演題および講師

中國の音樂と音樂觀　關西學院大學教授　張源祥
喜劇的なものについて　京都織維大學教授　河本敦夫
戲畫の歷史　大阪工業大學教授　森暢
繪卷物の話　京都博物館員　梅津次郎
宋元の繪畫　京都女子大學教授　中村茂夫
漢の畫像石　京都大學教授　長廣敏雄

十月三十日、大阪大學々長赤堀四郎氏が理事に就任。十一月二十日、理事長小倉正恆氏逝去。

昭和三十七年三月三十一日、村田數之亮理事退任。同日北澤敬二郎氏評議員退任。四月一日、今村理事が理事長に就任、北澤敬二郎、大阪大學文學部長天野利武の兩氏は理事に就任、事業運營委員木村英一、幹事岡野廉平の二氏は評議員（兼任）に就任した。五月二十一日より二十六日まで、大阪大學本部松下會館小講堂において第二十三回懷德堂講座を開催した。演題および講師

中庸　大阪大學教授　木村英一
顏氏家訓　大阪大學教授　守屋美都雄
漢書　立命館大學教授　平中苓次
かなの發生と古典文學　京都大學教授　阪倉篤義

白氏長慶集　立命館大學教授　高木正一

老子第八十章　甲南大學教授　秋田成明

——中國のユートピア——

八月十九日、評議員眞島利行氏歿す。十月一日より六日まで、大阪大學本部松下會館小講堂において第二十四回懷德堂講座を開催した。演題および講師

天竺の佛蹟を巡りて　相愛學園學長　今小路覺瑞

慈覺大師の入唐巡禮　國立奈良博物館員　小野勝年

敦煌の再生　京大助教授　藤枝晃

ウイグル文書探索行　阪大助教授　山田信夫

——中央アジアからロンドンまで——

ヨーロッパ文化と日本文化　同　豐田堯

歐米における中國研究　京大教授　宮崎市定

同月六日北濱本會において、記念祭恒典並に合祀祭を執行、故理事長小倉正恒氏を合祀した。次いで大阪大學教授村田數之亮氏の「ギリシャのヒューマニズム」と題する記念講演があった。

昭和三十八年一月二十日、元講師京都大學名譽教授文學博士鈴木虎雄氏歿す。五月二日評議員關桂三氏歿す。五月二十七日より六月一日まで、大阪大學本部松下會館小講堂において、第二十五回懷德堂講座を開催した。演題および講師

白氏文集	京大教授　平岡武夫
資治通鑑	大阪外大教授　外山軍治
四庫の分類法	京大人文科研所員　鈴木隆一
張彥遠「法書要錄」における六朝の書論	京美大教授　中田勇次郎
花傳書（風姿花傳）	阪大助教授　田中裕
周禮	京大教授　重澤俊郎

九月三十日より十月五日まで、大阪大學本部松下會館において、第二十六回懷德堂講座を開催した。演題および講師

米歐を巡っての所感 ——東西の文化と將來——	阪大教授　木村英一
日本人の評價 ——アメリカとイギリスの場合——	大阪市立大教授　內多毅
歐米における外國語教育 ——極東語を中心として——	大阪外大助教授　伊地智善繼
東南アジアの佛教 ——アジアの光——	京大講師　牧田諦亮
香港の一年	京大助教授　清水茂
アメリカの日本研究	阪大助教授　梅溪昇

十月五日北濱本會において、記念祭恒典執行、併せて鈴木虎雄先生を奉祀した。次いで大阪大學教授宮本又次氏

の「懐德堂の經濟思想」と題する記念講演があった。

昭和三十九年一月二十四日評議員中根貞彦氏歿す。三月三十一日理事天野利武氏退任。四月一日大阪大學文學部長時野谷勝氏理事就任。五月二十五日より三十日まで、大阪大學本部松下會館小講堂において、第二十七回懐德堂講座開催、演題および講師

論語の鄕黨篇	阪大教授	木村英一
陶淵明と現代	神大助教授	一海知義
周濂溪の通書	ノートルダム女大助教授	佐藤震二
日本上代の詩	大阪市大教授	小島憲之
鄂君啓節について——楚國の社會と文化——	奈良女子大教授	大島利一
鏡花縁	京大助教授	湯淺幸孫

十月三日北濱本會において、記念恒典執行、終って記念講演會を開き、大阪大學教授犬養孝氏の「萬葉と風土」と題する講演があった。十月十九日より二十四日まで、大阪大學本部松下會館小講堂において、第二十八回懐德堂講座開催、演題および講師

森恪と大阪	大阪市大教授	中山治一
荻生徂徠	同志社大教授	今中寛司
偉人と英雄——フリードリッヒとナポレオン——	阪大教授	豐田堯

釋慧遠　阪大助手　木全德雄
ゲーテ　阪大教授　田中建二
孔子　同　木村英一

昭和四十年三月一日、正田建次郎、弘世現、阿部孝次郎、寺尾威夫、大原總一郎、堀田庄三、松下幸之助の七氏評議員就任。五月二十四日より二十九日まで、大阪大學本部松下會館小講堂において、第二十九回懷德堂講座開講、演題および講師

經書の成立　阪大教授　木村英一
明夷待訪錄　京大教授　西田太一郎
李義山　作家　高橋和巳
自然と人爲　阪大助教授　森三樹三郎
食經について　四條畷女子短大教授　篠田統
連歌の話　阪大教授　田中裕

六月三十日事業運營委員小島吉雄氏退任。七月一日阪大教授田中裕氏事業運營委員就任。八月二十三日事業運營委員藤直幹氏歿す。

十月十一日より十六日まで、大阪大學本部松下會館小講堂において第三十回懷德堂講座開講、演題および講師

一遍と日蓮　阪大助教授　黑田俊雄
グリフィスと明治日本（幻燈使用）　阪大助教授　梅溪昇

紫　式　部　　大阪女子大教授　玉上琢彌

古代エジプトの宗教と美術　　關大教授　加藤一朗

エジプトとヨーロッパ（幻燈使用）　　阪大名譽教授　村田數之亮

五代友厚　　阪大教授　宮本又次

昭和四十一年一月二十二日評議員川田順氏歿す。三月三十一日理事時野谷勝氏退任。五月二十三日より二十八日まで、大阪大學本部松下會館小講堂において、第三十一回懷德堂講座開講、演題および講師

漢書藝文志　　阪大教授　木村英一

江戸時代の篆刻　　京都美大教授　中田勇次郎

韓非子　　羽衣學園教授　大久保莊太郎

白氏文集　　京都府大教授　花房英樹

貝原益軒の養生訓　　阪大教授　丸山博

日本における漢字　　同　池上禎造

六月三日顧問武內義雄氏歿す。七月十日理事兼事業運營委員守屋美都雄氏歿す。八月一日澤瀉久敬氏（大阪大學文學部長）理事就任。時野谷勝氏（大阪大學教授）事業運營委員就任。十月十五日午前十時三十分より、大阪大學本部松下會館小講堂に於て、重建懷德堂開講五十周年記念式典竝びに恒祭を執行、併せて物故顧問武內義雄氏を奉祀、終って右五十周年記念講演に移り、大阪大學文學部長（本會理事）澤瀉久敬氏の「生命と精神」と題する講演があった。十月十七日より二十二日まで、大阪大學本部松下會館小講堂において、右五十周年記念懷德堂講

座第三十二回開講、演題および講師

西村天囚先生のこと	後醍院良正
内藤湖南先生のこと	宮崎市定
狩野君山先生のこと	吉川幸次郎
懷德堂五十年の歩み	木村英一
武内誼卿先生のこと	小川環樹

公開座談會「懷德堂を語る」

十二月十六日理事赤堀四郎氏退任。同月十七日岡田實氏（大阪大學總長）理事就任。

昭和四十二年五月二十二日より二十七日まで、大阪大學本部松下會館小講堂において、懷德堂講座第三十三回開講、演題および講師

論語の學而篇	大阪大學　木村英一
李長吉の詩	橘女子大學　荒井健
芭蕉の一面	大阪女子大學　大谷篤藏
茶經	大阪大學　布目潮渢
隱遁思想と孔子	立命館大學　笠原仲二
傳習錄	京大人文科研　島田虔次

六月十三日、理事長今村荒男氏歿す。七月一日、理事上野精一氏理事長に就任。十月十四日、北濱本會において

記念祭恒典執行、故理事長今村荒男氏を奉祀、次いで大阪大學助教授黒田俊雄氏の「日本封建社會の特質」と題する記念講演があった。十月十六日より二十一日まで、大阪大學本部松下會館第五會議室において、懷德堂講座第三十四回開講、演題および講師

大阪の心學	近大教授 心學明誠舍	竹中靖一
山片蟠桃	關大教授	有阪隆道
大鹽中齋	大阪城天守閣主任	岡本良一
泊園書院について	大谷大學講師	水田紀久
懷德堂と麻田剛立	中井家後裔	羽倉敬尚
麻田剛立の解剖學	日本醫史學會會長	小川鼎三

懷德堂座談會

十一月九日、事業運營委員時野谷勝氏評議員を兼任。

昭和四十三年二月十一日、事業運營委員石濱純太郎氏歿す。三月三十一日、理事澤瀉久敬氏退任、四月一日評議員に就任。四月一日、田中健二氏（大阪大學文學部長）理事に就任。五月二十七日より六月一日まで、大阪大學本部松下會館第五會議室において、懷德堂講座第三十五回開講、演題および講師

論語に見える子貢	大阪大學	木村英一
春秋について	關西大學	竹内照夫
莊子について	大阪大學	野村茂夫

漢字と文化　京大人文科研　平岡武夫
日本における佛教と古典文藝　京都府立大學　小田良彌
文心雕龍　愛知學藝大學　興膳宏

七月二十七日、評議員大原總一郎氏歿す。

事業

一　終戰前の事業

終戰前の懷德堂記念會は、大正五年に建立した講堂および事務所と、大正十五年に竣工した書庫および研究室とを有して、大様左の如き事業を行って來た。

一、定日講義
二、土曜講演
三、通俗講演
四、素讀
五、恒祭ならびに記念講演

六、出版

記念會が今までに行った出版は左の如くである。

㈠　論語義疏

皇侃の論語義疏は、中國に佚して我國に傳鈔された古書である。大正十一年は孔子歿後二千四百年に當るので、これを記念するため、この書の古鈔本を集めて校勘し、定本を作って刊行した。講師武內義雄氏がその事に當った。

㈡　懷德堂考

西村時彥氏の著述で、最初、大阪朝日新聞に連載された。大正十四年十一月、本堂において五百部を限って重印し、末尾に懷德堂復興小史および中井木菟麻呂氏の撰した懷德堂年譜を附印した。

㈢　懷德堂文科學術講演第一輯

大正十四年より、每年一回もしくは數回、懷德堂講演集を發刊することとなった。そこで同年六月、定期講演の一部を編してこの第一輯を作り、これを東京弘道館から發行した。

㈣　懷德堂百科通俗講演集

懷德堂における通俗講演の一部を編したもので、これもその第一輯である。前掲の文科學術講演集と同年同月、同じく東京弘道館から發行した。

㈤　北宋五子哲學

敎授文學博士松山直藏氏の遺著である。昭和六年三月二十五日に刊行した。

(六) 碩園先生遺集

文學博士西村時彦氏の遺著である。文集三卷、詩集三卷、屈原賦說卷上、共に五册とし、昭和十一年十月一日に刊行した。

(七) 懷德堂印存

この書は、昭和十五年一月、住友家史編纂係野内芳藏氏が、本堂の依囑によって、中井家の竹山、履軒、蕉園、柚園、桐園五先生の遺印を借り、五十部を限ってこれを押捺編製したものである。

(八) 草茅危言

この書は中井竹山先生の遺著である。昭和十六年は重建懷德堂二十五周年に當るので、これを記念するため、本堂所藏の手稿本によって印行した。

七、奬學

永田仁助氏が漢學奬勵のために寄附せられた金五萬圓の基金があって、年々その基金より生じる利子を以て漢學研究者の補助奬勵に充てていた。

八、文庫の公開

以上が、終戰前における懷德堂記念會の事業であった。

ところが昭和二十年に戰災によって講堂および事務所を失い、終戰後は諸種の事情が劇變したので、新たに懷德堂講座を開設し、また恒祭と記念講演とだけはこれを繼續して、今日に至っている。

二　懷德堂講座

戰後の懷德堂記念會は、文庫の藏書を大阪大學に寄附し、事業は同大學と共同で行うことになった。そこで昭和二十五年に、大阪大學、京都大學、大阪市立大學、關西大學等の教授九名に囑託して事業運營委員會を設け、その企畫に從って、昭和二十六年から、毎年春秋二季、各六日間ずつの懷德堂講座を開設した。春季は五月下旬、秋季は九月下旬または十月上旬に開くのが定例となっており、毎夜六時半から約一時間半、碩學一位を聘して講演を聽くのがこの講座で、無料で公開されている。

三　恒祭と記念講演

これは戰前から行われている行事を繼續したものであって、毎年一回、十月五日前後の土曜日を選んで執行することになっている。十月五日は、享保十一年に舊懷德堂が完成した時、三宅石菴先生がはじめて講席を開かれた記念日である。祭神は懷德堂師儒諸先生と、懷德堂記念會の物故諸先生ならびに物故功勞者とである。

懷德堂記念會には、恒祭について、戰前から左の奉祀規定がある。

第一條　懷德堂記念會ハ本會ノ事業並ニ經營維持ニ功勞アリタル物故者ヲ奉祀シ毎年一回恒祭ヲ行フ

第二條　奉祀者ハ理事會ニ於テ之ヲ銓衡シ評議員會ニ協議シテ之ヲ決定ス

また記念講演については「毎年恒祭執行後碩學を聘して記念講演會を行う」ことになっている。

祭神

一、懷德堂師儒諸先生

三宅石菴　三輪執齋　伊藤東涯　中井甃菴　並河誠所
井上赤水　五井蘭洲　三宅春樓　中井竹山　中井履軒
中井蕉園　中井碩果　中井桐園　並河寒泉　中井柚園
懷德堂五同志

二、懷德堂記念會物故諸先生並功勞者

物故教授

松山直藏　財津愛象　吉田鋭雄

物故顧問

內藤虎次郎　狩野直喜　武內義雄

物故講師（常任講師及び臨時講師）

內田銀藏　原勝郎　西村時彦　藤代禎輔　坂口昂
稻束猛　深田康算　波多野七藏　澤村專太郎　藤井健治郎
桑原隲藏　三浦周行　佐々木恆清　今西龍　田島錦治
林森太郎　岩井勝二郎　新城新藏　武藤長平　岡山源六
大塚末雄　大江文城　秋月胤繼　松本文三郎　天沼俊一
新見寛　高瀨武次郎　鈴木虎雄

物故功勞者

土居通夫　水落庄兵衛　上野理一　鈴木馬左也　小山健三
西村時彦　坂仲輔　男爵住友吉左衛門　永田仁助　男爵鴻池善右衛門
本山彦一　村山龍平　野々村政也　中橋德五郎　男爵藤田平太郎
今井貫一　田中隆三　大久保利武　成田軍平　荒木寅三郎
江崎政忠　古田俊之助　木間瀬策三　岡橋林　小倉正恒

役員

一　財團法人懷德堂記念會役員

理事長　上野精一
理事　上野精一　北澤敬二郎　岡田實　田中健二
幹事　岡野廉平
評議員　村山長擧　永田仁助　勝本鼎一　坂間棟次
伊藤忠兵衛　飯島幡司　木村英一（事業運營委員兼任）
岡野廉平（幹事兼任）　正田建次郎　弘世現　阿部孝次郎

寺尾威夫　堀田庄三　松下幸之助　時野谷勝
澤瀉久敬

理事長　永田仁助
理事　水落庄兵衛　田中隆三　古田俊之助　今村荒男　桑田芳藏　天野利武　上松寅三
幹事　芝川又右衛門　高見亀　平賀敏　芦田順三郎　安原舜一　小畑富記
評議員

〔舊役員〕

小倉正恒　廣岡惠三　野々村政也　木間瀬策三　正田建次郎　藏内數太　時野谷勝　谷川清澄　高谷恒太郎　宮島茂次郎　上野理一　小山健三　中田錦吉　中川望

今村荒男　西村時彦　今井貫一　岡橋林　赤堀四郎　小島吉雄　守屋美都雄　尾崎保之助　島村久　柴直太郎　黒木吉郎　今西林三郎　住友吉左衛門　廣海二三郎

坂仲輔　江崎政忠　藤直幹　澤瀉久敬　成田軍平　土居通夫　三邊長治　鈴木馬左也　福士末之助　池上四郎　平瀬三七雄

永田仁助　小倉正恒　村田數之亮　横山助成　水落庄兵衛　殿村平右衛門　西村時彦　木間瀬策三　山本理一

野々村政也　愛甲兼達　鴻池善右衛門　湯川寛吉　土屋元作
本山彦一　高木利太　樋口三郎兵衛　村山龍平　城戸元亮
中橋徳五郎　勝本忠兵衛　池原鹿之助　關一　小林利昌
岩井勝次郎　弘世助太郎　阿部房次郎　岡實　藤田平太郎
山口吉郎兵衛　大久保利武　杉村正太郎　加藤晴比古　山崎一保
楠本長三郎　平田譲衛　野村徳七　庄司乙吉　小林林之助
高原操　高石眞五郎　一瀬粂吉　森下博　稲畑勝太郎
佐多愛彦　堀越壽助　奥村信太郎　成瀬達　林市藏
坂田幹太　森平兵衛　廣岡惠三　村田省藏　北澤敬二郎
眞島利行　關桂三　中根貞彦　川田順　大原總一郎

二　委　囑

講師（常任）　阪倉篤太郎　張源祥

事業運營委員　神田喜一郎　内藤乾吉　吉川幸次郎　貝塚茂樹
木村英一　田中裕　時野谷勝

書記　藤塚誠二

〔舊委囑者〕

顧問　狩野直喜　内藤虎次郎　武内義雄

教授　松山直藏　財津愛象　吉田鋭雄

助教授　吉田鋭雄

講師（常任）　西村時彦　吉澤義則　林　森太郎　武内義雄　財津愛象

稲束　猛　吉田鋭雄　秋月胤繼　佐々木恒清　阪倉篤太郎

武藤長平　岡山源六　大江文城　張　源祥　新美　寛

教師（素讀擔當）　波多野七藏　吉田鋭雄

事業運營委員　桑田六郎　小島吉雄　藤　直幹　守屋美都雄　石濱純太郎

書記　吉田鋭雄　矢壁鐵之助

附錄

一　懷德堂記念會の趣旨

財團法人懷德堂記念會趣旨

維新前に於ける我が大阪唯一の學校なりし懷德堂は中井甃菴先生が、大阪の商人なる中村睦峰（三星屋武右衞門）富永芳春（道明寺屋吉左衞門）長崎克之（船橋屋四郎右衞門）吉田盈枝（備前屋吉兵衞）山中宗古（鴻池又四郎）の五有志と謀りて、諸同志を糾合し、三宅石菴先生を聘して尼崎町一丁目北側（今、其跡は今橋通四丁目北側）に創立せし者にして、時に享保九年なり、同十一年幕府の官許を得てより、大阪學問所とも稱し、石菴先生歿後は甃菴先生學主と爲り、五井蘭洲先生教鞭を執る者、前後二十年、尋きて甃菴の子竹山（懷德堂學主）履軒（水哉館塾主）二先生崛起してより、大阪の文學、雄を海內に稱し、子孫相繼ぎて業を世にし、以て維新の際に至る。世態一變して學校も亦廢したりしが、創立より廢學に至るまで、絃誦の聲を絕たざるもの、實に百四十餘年なり、竹山履軒二先生の門、人材輩出して海內に分布し、以て一世の文化を振興せり、斯る大儒を我が大阪に出だしし、豐太閤の大阪城にも讓らざる偉蹟と謂ふべし、然れども我々後人の最も深く懷德堂に感銘する所以の者は、大阪唯一の學校としての大阪の文教を主るもの久しく、大阪人を教育して、其の品性を養ひ、其風俗を正し、以て世道

人心を維持せしに在り、我が大阪は古より商業を以て著はれ、國運振張の今日に在りて、亦商工業の中心と稱せらるる所以の者は、古來養成したる大阪人の品性と良習慣とに起因すべく、品性と良習慣とは、並に教化の致す所にして、懷德堂百四十餘年間の文教に負う所の者莫大なり、君父師は之を三恩と曰ふ、報本反始は人の道なり、大阪人たるもの、今日の盛を致しゝ所以を思ふて、而して祖先の受けたる教化の恩を銘し、以て將來の德育に留心せざる可らず、顧ふに天地の在らん限り、人類幸福の基礎は道德に在り、國家の隆昌も、社會の平和も、家庭の安樂も、皆此に根柢す、而して商業上道德の尙ぶ可きは、固より言を待たず、古來の教化の効、能く盛を今日に致せる大阪が、亦能く繁榮を將來に獲んと欲せば、一たび其頭を回して源に溯り故に溫ねんことを要す、則ち我が大阪人が今古に俯仰して、自ら省み自ら戒むるに適當なるは、懷德堂の歷史に若くなし、是れ嚮きに懷德堂記念會を興し、明治四十四年十月五日（十月五日は幕府の官許を得て講を開きたる記念日なり）を卜し、懷德堂師儒先生の靈を祭り、且つ碩學を聘して講演を開き、遺書を刊行し、遺墨を展覽し、以て一は百四十餘年間教化の恩に報い、一は世道人心の振興に資するところありし所以なり、厥後同會發起人及び役員相會し、同會の剩餘金を以て基本資產とし、更に同一の趣旨の下に懷德堂記念會を興し、有終の美を濟さんことを決議せらる、是れ這般本會の設立を見たる所以にして、卽ち此れを財團法人の組織と爲し、以て本會の趣旨を永遠に遂行せんことを期す、因て此に其成立の來歷を宣明す。

大正二年九月一日

二　財團法人懷德堂記念會寄附行爲

第一章　目的

第一條　本會ハ左ノ方法ニ依リ、國民道德ノ進歩ニ力メ、學術ノ發達ヲ圖リ、本邦文化ノ向上ニ資スルヲ以テ目的トス

一、學術講演會ヲ開クコト

二、講演集及ビ其他圖書ノ編纂出版ヲナスコト

三、大阪先賢ノ事蹟及ビ著書ヲ調査表彰スルコト

四、奬學金ヲ支出シ、學術ノ研究ヲ奬勵スルコト

第二章　名稱

第二條　本法人ハ懷德堂記念會ト稱ス

第三章　事務所

第三條　本會ノ事務所ハ大阪市東區北濱三丁目三十番地ニ置ク（モト「大阪市東區豐後町懷德堂ニ置ク」トアツタノヲ昭和二十八年十一月四日付變更申請、昭和二十九年九月二十一日付認可）

第四章　資金

第四條　本會ハ舊懷德堂記念會ヨリ引繼ギタル金六千圓及ビ有志者ノ寄附金ヲ以テ基本財産トス

第五條　基本財産ノ管理方法ハ理事會ニ於テ之ヲ定ム

第六條　本會ノ經費ハ基本財産ヨリ生ズル利子及事業ヨリ生ズル收入ヲ以テ之ニ充ツ

第七條　本會ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始リ、翌年三月三十一日ニ終ル

第八条　基本財産ハ理事會ノ決議ニ依リ、動産ヲ不動産ニ或ハ不動産ヲ動産ニ變ズルコトヲ得

第五章　役　員

第九条　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

理　事　七人以内　互選ニ依リ内一人ヲ理事長トス

幹　事　二　人

評議員　十五人以上二十五人以内（モト「三十人以上五十人以内」トアッタノヲ、昭和四十二年十一月二十四日付變更ヲ申請、同年十二月二十八日付認可）

第十条　理事ノ任期ハ二年トス、但シ滿期再選ヲ妨ゲズ、本法人設立ノ際ニ在テハ、設立者ヲ以テ理事トシ、前項ノ期間在任ス、理事ノ任期滿了シタルトキ又ハ缺員ヲ生ジタル時ハ、評議員會ニ於テ維持會員中ヨリ改選又ハ補缺選擧ス、補缺理事ノ任期ハ前任者ノ殘任期間トス

第十一条　理事ハ本財團ヲ代表シテ諸般ノ事務ヲ管理シ、理事長之ヲ統括ス

第十二条　本法人設立ノ際ニ於ケル評議員ハ、理事會ニ於テ囑托ス、評議員ニ缺員ヲ生ジタル時ハ、評議員會ニ於テ維持會員中ヨリ補缺囑托ス

第十三条　評議員ハ本財團ノ重要事項ニ關シ意見ヲ述ベ、且之レガ協議ニ應ズ

第十四条　幹事ノ職務及任免ニ關スル規定ハ、理事會ノ決議ヲ以テ別ニ之ヲ定ム

第六章　維持會員

第十五条　本會ニ金壹百圓以上ヲ寄附シタル者及評議員會ノ推選シタルモノヲ以テ維持會員トス

附　則

第十六条　本寄附行爲ハ理事會ノ決議ニ依リ、主務官廳ノ認可ヲ得テ變更スルコトヲ得

三　懷德堂々友會

一、設立の趣旨と會則

堂友會は、懷德堂の聽講生および曾て聽講生であった人々の同志が結成した會であって、相互の親睦と切磋とを目的とするものである。大正十二年の六月に、一部の有志によって發起され、多數の賛同を得て、同年十一月四日の懷德堂恒祭の日に發會式を擧げた。かくて會則を定め、教授を推して會長とし、吉田助教授に主幹を囑し、幹事を定めて、會の組織が成立した。爾來、會則の定めるところを實行して目的を達成すると共に、會員は協力一致して堂のために盡したところは少くはなかった。ここに先づ當初の趣意書を掲げると、左の如くである。

懷德堂堂友會設立趣旨

懷德堂開講以來茲ニ七年、其ノ間聖賢ノ教ヲ聽キテ之ヲ喜ブモノ蓋數百人、想フニ吾人ト道ヲ共ニシ樂ヲ同ウスルモノ亦尠少カラザルベシ。然レドモ毎講時ヲ計リテ經筵ニ列シ、講終リテ直チニ解散スルヲ以テ、同人蓋簪シテ相語リ胥樂ムノ機會ナキラ惜ム。是ヲ以テ吾人敢テ自ラ揣ラズ堂友會ヲ起シテ此ノ缺陷ヲ補ヒ、以テ相互ノ親睦ヲ厚ウセント欲ス。同感ノ諸彦奮テ賛翼セラルレバ幸甚

大正十二年六月

戰時中から終戰直後へかけて、大阪が燒土と化したのに伴って、會員の多くを失ったが、熱心な有志の努力に

よって廢絶に至らず、漸く組織を回復して會則を改正し、また新しい企劃による行事を行って、今日に至っている。その間、時々部分的に會則を改正したが、現行の會則は左の如くである。

懷德堂堂友會會則（昭和四十三年九月六日改正）

第一條　本會を懷德堂堂友會（略稱堂友會）と稱し、懷德堂聽講生並に懷德堂事業の共鳴者を以て組織する

第二條　本會は懷德堂の趣旨に遵い德性の涵養、智識の向上及び堂友の親睦を圖るを以て目的とする

第三條　本會の事務所を大阪大學文學部內懷德堂事務連絡所內に置く

第四條　本會の目的達成のため左記行事を適宜催す

一、見　學　會

二、講演會、茶話會等の諸會合

三、雜誌『懷德』の發行（年刊）會員には無料頒布する

第五條　本會の會員種別を左の通りとする

一、名譽會員　懷德堂記念會役員、事業運營委員、講師等の中より推選する

一、維持會員　金一萬圓以上の寄附者（數回に寄附するも可）

一、正　會　員　會費年五百圓、但二百五十圓ずつ二回に分納するも差支えない

第六條　本會に會長一名、委員若干名を置き、會務一切を處理する。會長の任期は特に定めず、委員の任期は一ケ年とし、重任を妨げない

第七条　會長は名譽會員の推薦に基づき、本會が推戴する。委員は會長が指名する。委員中より會計一名を互選するものとする

二、終戰後の堂友會の活動

戰災によって一時機能の停止を餘儀なくされた堂友會は、その後、熱心な同志の努力によって漸次復興の道をたどり、今日に至ってゐることは、既に述べた通りであるが、その間、次の二つの事業を行うことが定例化した。

一、堂友會誌『懷德』の發行

既に戰前からこの雜誌の刊行が行われて、二十一號を重ねていたが、昭和二十六年、堂から刊行費の補助を得てこれを復刊した。復刊第一號を以て第二十二號とし、毎年一回、これを編輯して、秋に刊行することとなった。

昭和二十六年十月六日、第二十二號を發行
昭和二十七年九月一日、第二十三號を發行
昭和二十八年十月二十日、第二十四號を發行
昭和二十九年十月五日、第二十五號を發行
昭和三十年十月五日、第二十六號を發行
昭和三十一年十月一日、第二十七號を發行
昭和三十二年十月一日、第二十八號を發行

昭和三十三年十月一日、第二十九號を發行
昭和三十四年十月一日、第三十號を發行
昭和三十五年十月一日、第三十一號を發行
昭和三十六年十月一日、第三十二號を發行
昭和三十七年十月一日、第三十三號を發行
昭和三十八年十月一日、第三十四號を發行
昭和三十九年十月一日、第三十五號を發行
昭和四十年十月一日、第三十六號を發行
昭和四十一年十月一日、第三十七號（現懷德堂開講五十年記念號）を發行
昭和四十二年十月十日、第三十八號を發行

二、見學會

戰前に屢々堂友會主催の見學會があって、史跡を巡り、專問の講師に臨地の說明、指導を請うて、知識の習得と會員の親睦との上に、多大の成果を擧げていた。昭和三十年、堂の補助を得てこれを復活することになり、爾來、每年兩三度、これを實行している。每回多數の參加者があって、樂しい會になっている。

昭和四十三年十月十日　發行

（非賣品）

發行所　大阪市東區北濱三丁目三十番地
財團法人　懷德堂記念會

印刷所　京都市下京區中堂寺鍵田町二番地
株式會社圖書印刷　同朋舍